英語における性とことば

――「丁寧さ」と女性ことばを中心に――

北　林　利　治

はじめに

ロビン・レイコフ（Robin Lakoff）が1975年に出版した『言語と性：英語における女の地位』(*Language and Woman's Place*)[1] は、英語における女性ことば研究の嚆矢となった重要な著作である。この本の日本語訳の新訂版に、訳者によるレイコフへのインタビューが収録されている。このなかで、アメリカでは最近、性差別がかなり意識されるようになったが、この本が最初に出版されたころとくらべてアメリカ英語はどのように変わったと思うか、という問いに対して、レイコフは、人々の意識の奥までずいぶん性差別への意識が浸透したことを思わせる変化が見られるが、脱差別化にたいする抵抗は、根深いところで強いと指摘し、女性を、言語においても男性に　たいして従属的な存在と見る表現が根強く残っているといっている。そして、言語は社会状況の徴候であって、社会が変わらなければ、言語が根本的に変わることはないと主張している。

レイコフは、このインタビューで、もうひとつ興味深い発言を行なっている。『言語と性』の執筆は言語学者としてのあなたにどんな影響をあたえたか、という質問にたいして、言語と性の問題は、執筆当時は社会的問題として論じられていて、言語の形式とは関係がないと考えられていたが、事実は、言語は性によって条件づけられているし、性差から出てくるものであるということがはっきりした、と述べている。その後のレイコフの仕事は、現実世界における私たちのパーソナリティーとか役割は、私たちのことばの使い方、理解の仕方に影響されるものであるということを追求しているようである。

私は、この小論文において、レイコフの提起している２つ目の問題、すなわち、言語における性差表現は、それを使用する人の認識とどのようなかかわりがあるのかという問題を追求したいと思う。そのさい、思考は言語によって相対化されるという「言語相対論」をあたらしい観点から見直しているウィアズビッカ（Anna Wierzbicka）の意味理論にも言及したい。彼女は、言語とそれを話す人の思考様式、また、コミュニケーション・パタンには関係があるということを主張している。ウィアズビッカの著作のなかには、女性ことばについての言及はないが、彼女の意味理論を検討しながら、言語と性の問題に取り組んでいきたいと思う。

1．ロビン・レイコフの『言語と性』

ロビン・レイコフ『言語と性』の第１の重要性は、女性ことばを、科学的な言語学の研究対象

として位置づけた点にある。それ以前の女性ことばの研究では、ステレオタイプ（stereotype）にとらわれた研究が主であるといえる。ステレオタイプとは、一定の集団におしつけられた固定的概念のことであるが、あやまった否定的ステレオタイプは、社会の偏見を作りだし、補強する働きをしている。女性ことばのステレオタイプには、「女性はおしゃべりだ」、しかし、「その話し方は非論理的」で、「内容に乏しい」などの否定的なものが多い。たとえば、イェルペルセン（Otto Jespersen）も、1922年に出版した『言語：その本質、発達および起源』のなかで、「女性というものは本能的に下品な表現をさけ」「もし、われわれが常に女性の表現方法で満足しているならば、言語がだらけて無気力となる危険性がある」とか「女の方が男より流暢であるのは、いうべき思想も乏しく語句も乏しいから、そもそも、選ぶ必要がないからである」など、ステレオタイプに満ちた発言を行なっている。(2)

いまひとつの『言語と性』の重要性は、この本で、レイコフが、女性ことばの研究とひと口にいっても、①女性をさすことば、あるいは、女性をあらわすことばと、②女性が使うことば、の２つの研究分野があるということをはっきりと示した点である。

まず、女性をさすことば、女性にかんすることばとして、ここでは、３つの観点からまとめてみよう。最初の例は、「人間＝男」観を示すものとしてしばしば言及されるものである。

(1) Man stood upright, and a new day dawned.

この例から分かるように、英語では、＜男＞をあらわす“man”という単語で、＜人間＞全体をさすこともできる。図１は、このことを示したものである。このような例は、図２からもわかるように、日本語にもうかがうことができる。(3)

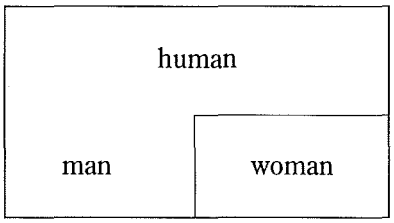

図１

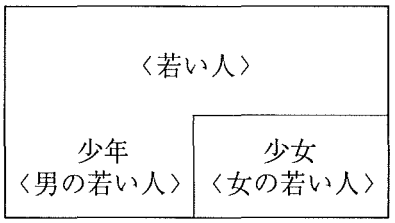

図２

＜男の若い人＞をさす「少年」で、＜女の若い人＞もふくめて、男女にかかわりなく＜若い人＞全般をさすことができる。

英語では、男女の対になっている表現は、必ず、男性形が基本になっており、女性形は、男性形になにかを付加することによって作られる。

(2) a. doctor —— woman doctor
b. waiter —— waitress
c. actor —— actress

(a) では、＜女医＞という女性の医師を明示したいときには、“woman” を付加する。(b) と (c) では、女性形は、“ess” を付加することによってあらわされる。また、男性と女性の区別なく全体をいうときには、必ず、男性形が使用されるという点にも注意を払う必要がある。

次の例は、「女性を性の対象」として見ている例である。男性にかんして用いられた場合には、“professional” は「専門職」をさすが、女性にかんして用いられた場合には、「売春婦」をさすといわれている。(4)

(3) a. He is a professional.
　　b. She is a professional.

最後の例は、「女性を男性の所有物」として見ている例である。“She is John's widow” は英語として使われるが、“He is Mary's widower” は、英語では一般的に用いられない。

(4) a. She is John's widow.
　　b. He is Mary's widower.

つまり、John が亡くなっても、Mary は John に所属するものとして見られるのにたいして、男性にかんしては、そのようなことは社会的にも考えられないということを、英語表現が反映しているという指摘である。(5)

もう１つの研究分野として、ロビン・レイコフが提唱したものは、「女性の話し方」としての「女性ことば」である。レイコフは、女性の話し方として、次のようなものをあげている。

① 女性は、細かい区別の色彩語を用いる。これは、色の区別などのつまらない決定のみ女性に任されているからである。“The wall is mauve”（「壁はモーブ色です」）という表現は、男性が用いると奇妙な印象をあたえるという。
② 女性は “Shit!”（「くそ！」）などの罵り言葉をさけ、“Oh dear!”（「まあ！」）などの表現を使う。人は激しく表現する人に耳を傾けるものなので、これは、社会における男性の立場をさらに強化している。
③ 女性は、“adorable”（「すてき」）のように、言及している概念をつまらない、どうでもよいことのように感じさせる形容詞を使う。
④ 女性は、話し手の自信のなさをあらわす付加疑問や上昇イントネーションを多く用いる。
⑤ 女性は男性より丁寧な依頼のしかたを用いる。

レイコフのこの著作は、以後の研究のすべての基礎になった。そして、以後この分野において多くのデータが発掘されて、さまざまな理論が提唱されたが、彼女の著作は、その輝きを現在においてもけっして失ってはいない。

2．コミュニケーションにおける女性の話し方

前節で見たように、レイコフは、女性のいろいろな話し方をあげているが、これをさらに、2つに分けることができる。1つめは、どんな単語や表現を使用するかという問題であり、第2は、どのようにことばを使用するか、あるいは、会話の運び方はどうかという問題である。このセクションでは、後者の問題について、考察を深めていきたい。

この問題を考察する前に、ひとつ注意しておかなければならないことがある。会話の進め方とか、コミュニケーションの行ない方というのは、男性でも女性でも、また、英語文化でも、日本語文化でも、どこでも同じであるという考え方をもつ人がいるかも知れない。たとえば、グライスの提唱した4つの会話の格率（the maxims of conversation）は、一般に、どの文化においても通用する普遍的なものであると考えられている。(6)

① 量の格率：話し手は聞き手に発言の理解に十分な情報をあたえる必要があるが、必要以上のよけいな情報をあたえてはならない。「今日の会議はどの部屋でしたか」と聞かれたら、場所の情報をあたえるのは必要であるが、聞かれてもいないのに、会議の時間や、議題を自分から長々としゃべるのは、必要以上の情報をあたえていることになり、ふさわしいコミュニケーションではない。

② 質の格率：まちがっていることや証拠のないことをいってはならない。コミュニケーションにおいては、うそをつくことはある。しかし、通常のコミュニケーションでは、わざとまちがった情報を伝えることはない。

③ 関係の格率：発言内容が、その会話の内容に関係あるものでなければならない。「会議は何時からですか」ときかれて「大会議室です」と答える人はいないだろう。4つの格率のなかでももっとも大切な格率である。

④ 様態の格率：発話は明確で順序だっていなければならない。時間の流れにそって話すときには、出来事がおこった順に話すのがわかりやすい。

これらの4つの格率は、まったく当然なコミュニケーションのルールのように思える。それゆえ、普遍性が高いものと考えられる。しかし、これらの格率があてはまるのは、事実にかんする情報を伝達するという場面でのみである。それぞれの格率の説明として、上で例としてあげたように、「場所」や「時間」を尋ねる場合は、たしかに、この格率はあてはまる。しかし、事実の情報をたんに伝達するという場面ではなく、相手になにかを丁寧に依頼するというような場面では、必ずしも、上の格率はあてはまらない。実際のコミュニケーションにおいて、人はしばしば、間接的にいったり、くり返しを多く使ったり、誇張したり、故意に不明瞭にいったりするものである。そして、言語使用のこの側面に注目すれば、言語間にはかなりの差が見られる。会話の進め方やコミュニケーションのパタンも普遍的ではないと考えなければならないであろう。このような観点に立てば、女性の会話パタンには、男性と違った独自のコミュニケーションのパタンがあると

いう考え方には妥当性があるように思われる。

では、女性の話し方、コミュニケーションのパタンのいくつかを、ホームズ（Janet Holmes）の著作を参考にして検討してみることにしよう。(7) まず、第1は次のようにまとめることができる。

女性は会話の情緒的（affective）機能に大きな価値をおく。一方、男性は、言語の情報伝達（informative）機能に重きをおく。

次の例は、夫婦の会話である。ドライブ途中で、妻が夫に、「ちょっと止まって何か飲まないか」と尋ねている。夫は、短く「いらない」と答えている。(8)

(5) S u e：Would you like to stop for a drink?
John：No.

Sue の発言は、相手の希望を聞いている表現ではあるが、実は、彼女はちょっと何か飲みたかったのである。そして、夫との話の糸口を探りつつ、自分の希望を暗に伝えたかったのである。しかし、男性は、情報伝達に重要性をおいているので、たんに、自分の希望を尋ねられたのだと思い、「いいえ」と答えたのである。

もうひとつ、類例を見てみよう。夫婦が夕食を食べながら、その日の出来事を話している場面である。(9)

(6) Ann：That meeting I had to go to today was just awful.
Bob：Where was it?
Ann：In the NLC building. People were just so aggressive.
Bob：Mm. Who was there?
Ann：Oh the usual representatives of all the government departments. I felt really put down at one point, you know, just so humiliated.
Bob：You should be more assertive dear. Don't let people trample all over you and ignore what you say.

妻のアンは、その日の会議で積極的に意見をいうことができなくて、気持ちが沈んでいる。そのことを、夫に話して、理解と同情をもとめている。しかし、男性は言語の情報伝達という側面に重点をおいているので、夫のボブは、「もっとはっきりと意見をいった方がいいよ」（"You should be more assertive"）と妻にアドバイスをあたえている。

英語における女性のコミュニケーションの仕方の特徴の第2は、次のようにまとめることができる。

女性は、連帯意識（solidarity）を保ち、高めるような方法で会話をすすめる。男性は、相手より１段上に立とうとして、力（power）や地位（status）を高めるような方法で会話をすすめる。

このことを示す例として、しばしばあげられるのが、会話において、相手の発言にどれくらい割り込もうとして、重なりあうか（overlap）、また、割り込むことによって、相手の発言をじゃまするか（interruption）ということを調査した結果である。[10] この調査によると、男性と女性の会話においては、発言の「重なり」と「割り込み」は、ほとんどが男性のものであったという。つまり、男性が、会話の主導権をにぎろうとした結果であるといえる。

女性は、連帯意識を高めるための特別な言語表現を多く用いることも、しばしば指摘される。これは、女性のほうが、協力的で、相手に会話を促進している会話者であるという考え方であろう。次の例は、パーティーで、ホスト役の女性が話の話題を提供して、ゲストの居心地をよくしているところである。[11]

(8) You've got a new job, Tom, haven't you?

この例においては、付加疑問文の "haven't you?" は、話し手と聞き手の心理的な距離を縮める働きをしていると考えられる。このような付加疑問文の用い方は、女性にしばしば見られるという。

連帯意識と「ほめことば」（compliment）との関係もしばしば言及される。ホームズが調べた男性と女性のほめことばの回数にかんしてまとめてある表を見てみよう。ホームズがニュージーランドで得た会話のコーパスからの数である。[12]

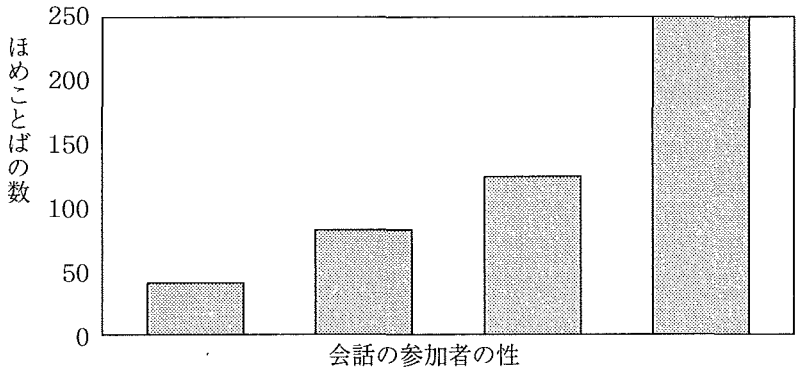

図３

上の図から、女性のほうがほめことばをたくさん使っていることが明らかである。会話の相手

をほめることによって、相手がよろこべば、話し手は聞き手と一体感をもつことができ、連帯意識を高めることができる。ほめことばは、それゆえ、連帯意識を高めるのに役立つ言語表現の1つである。

ほめことばは、ブラウン（Penelope Brown）とレビンソン（Stephen C. Levinson）が提唱しているポライトネス（politeness）の理論を援用して、次のように説明することもできる。ポライトネスというのは、日本語でいう「丁寧さ」というのはちょっと意味合いがことなる。ポライトネスの理論では、人間には2つの顔（face）があるとされる。これらは、人間の基本的な欲求の2つの側面で、他人から賞賛されたい、理解されたい、という「ポジティブ・フェイス」（positive face）と、自分の領域に立ち入ってほしくない、邪魔されたくないという「ネガティブ・フェイス」（negative face）である。そして、その「顔」をたてるためにとる言語のいろいろな手法が「ポライトネス・ストラテジー」である。「ほめる」というのは、「人から理解されたい、賞賛されたい」というポジティブ・フェイスを満足させるものなので、このような表現は、「ポジティブ・ポライトネス」であるということができる。「その服いいね」とほめれば、相手を、気持ちよくさせることになるので、これも、ポライトネスを実現する1つの方法ということになる。ポライトネスというのは、このように、言語形式の丁寧度としてではなく、人間関係を円滑に保つための言語の用い方ということになる。(13)

以上、女性のコミュニケーション・パタンとして2つの観点から考察してみたが、2つに共通することは、女性の言語表現には相手の立場を思いやった表現が多く、ポジティブ・ポライトネスを多く使っているということである。その意味では、女性ことばは「丁寧な」表現を好むのだということができる。しかし、「丁寧な」とは、いったいどのような意味をもつのであろうか。この問題を、節をあらためて、考えてみたい。

3. ことばの多義性

これまで、女性のコミュニケーションの方法という観点から「女性ことば」を見てきたが、これまでの分析の手順は、だいたい、次のようにまとめることができよう。

① 話し手を女性と男性に分けて言語的特徴の頻度を調べる。
② 女性が男性よりある特徴を頻繁に使用することを述べる。
③ それらの言語的特徴の機能は、表現を「間接的」「丁寧」にするものであると分析し、女性はこのような表現を好むと結論づける。

私が、ここで問題にしたいのは、③のところである。つまり、言語的特徴をみて、その機能が「間接的」とか「丁寧」とか判断するのは、実は容易なことではないということである。このことを説明するために、コミュニケーションにおいて、どんな単語を使うか、どんな表現を使うか、という問題を考えてみよう。たとえば、英語で“You know”という表現は、発言の内容が不確実

なときに用いる場合と、聞き手への親愛の情を示す場合がある。そして、

男性は、“You know” という表現を発言内容が不確実なときに用いる。だいたい、親愛をあらわす場合の２倍の頻度である。それにたいして、女性はだいたい同じ頻度で用いる。

という事実が観察されたとしよう。これらのことは、コンテクストによって、同じ表現が用いられても、それぞれに、異なって解釈せねばならないことを示している。つまり、当該の言語表現がどのような意味をもつかを、一概に決めることはできないということである。このことは、“You know” のように決まった言語表現だけではなく、ことばの用い方にもあてはまる。

さきにみた、「ほめことば」ということを考えてみよう。女性はほめことばの頻度が高いということは、さきに見たが、男性がほめことばをあまり使わないのは、それなりの理由があるようである。つまり、相手をほめることによって、お世辞をいった人は、相手より1段上に自分を位置づけることになる、このように男性は解釈するから、男性は「ほめことば」をあまり使わない、と考えることはできないだろうか。たしかに、男性は、コミュニケーションのパタンとして、さきにみたように、話し相手より1段高い地位をもとめてコミュニケーションを行なっているが、相手をほめるという行為と、ほめるという手段によって相手より１段上に立つということが矛盾なく両立しないのであろう。

男性が「ほめことば」を使うという言語行為についてどう思っているかということについて、次のデータを検討してみよう。(14)

syntactic formula	female %	male %
(1) NP BE (LOOKING) (INT) ADJ e.g. That coat is really great.	42.1	40.0
(2) I (INT) LIKE NP e.g. I simply love that skirt.	17.8	13.1
(3) PRO BE (a) (INT) ADJ NP e.g. That's a very nice coat.	11.4	15.6
(4) What (a) (ADJ) NP! e.g. What lovely children!	7.8	1.3
(5) (INT) ADJ NP e.g. Really cool ear-rings.	5.1	11.8
(6) Isn't NP ADJ! e.g. Isn't this food wonderful!	1.5	0.6
Subtotals	85.7	82.4
(7) All other syntactic formulae	14.3	17.6
Totals	100.0	100.0

図４

図4は、男性と女性がほめことばを使うときに、どのような統語的パタンを使うかを示したものである。男性と女性と頻度のパーセントがとてもことなっている形式が(4)と(5)の2つある。これらは、ほめことばとしては、積極的で強い表現である「感嘆文」を使用している表現である。このことからも、「ほめことば」なかでも、強い表現をともなう「ほめことば」は、男性は好ましくないものとしてとらえている、ということが分かる。男性は、相手をほめることは、「面子をつぶす」行為であると考えているわけである。

このような情況を、もうすこしよくとらえるために、次の女の子どうしの会話、男の子どうしの会話を見てみることにしよう。どちらも、小学校2年生の子どもどうしの会話である。前節で見たように、女性と男性のことば使いを連帯と地位という観点から見ると、次のような会話の意味をうまく解釈することができる。[15]

(9) Ellen：Remember? What —when I told you about my uncle? He went up the ladder after my grandpa? And he fell and, um, cracked his head open? He's — and you know what? It still hasn't healed.
Jane：One time, my uncle, he was, uh, he has like this bull ranch? In Millworth? And the bull's horns went right through his head.
Ellen：That's serious.

ここでは、女の子は、相手の女の子がとりあげたトピックにちょうど対応するような話を提供している。そして、最後に、Ellen は、「それは大変ね」という "That's serious" という印象的なことばを発している。もうひとつの特徴は、次の男の子どうしの会話にくらべて、ひとりの発言の長さが長いことである。これは、女の子は、会話を続けることによって、お互いの連帯を高め、友情関係を確認しているということを示している。

一方、次の男の子どうしの会話では、対立の枠組みの中で、会話を成立させている。[16]

(10) Jimmy：I've got four things to say.
Kevin：Yeah?
Jimmy：I've got four things to say.
Kevin：Tell me.
Jimmy：You doing good in your schoolwork, huh?
Kevin：Yeah.
Jimmy：Um, play soccer good?
Kevin：Uh huh.
Jimmy：You're nice. What was the last one? How are you?
Kevin：Fine.
Jimmy：It's your turn.

ここでは、２人の男の子は「インタビューごっこ」をしている。Jimmy が聞き役にまわり、“You doing good in your schoolwork, huh?” と聞き、Kevin が答えている。この場合、インタビュアー役が、相手より１段高い地位をもとめているということになる。そして、最後のところで、“It's your turn” といって、役割を交替している。しかし、ここで重要なことは、男の子の会話においても、２人が対立のわく組の中ではあるが、仲良く遊んでいるということである。つまり、女の子どうしのペア、男の子どうしのペアのどちらも、仲良く友だちどうしが遊んで、友好的にしているという点においては、同じであるので、表面的なことばの形式だけを見て、女の子の会話表現の方が「丁寧だ」とは一概にはいえないのではないかと考えられる。

このような観点から見れば、たんにその言語形式だけを見て、この表現は「丁寧だ」とか、これは「丁寧ではない」と断言するのは容易ではないということが分かる。次の節では、人の「ことば使い」や「コミュニケーションの方法」は、話し手がその発話の情況や聞き手や情況との関連においてもっている、情況にたいする、あるいは、相手にたいする価値観が反映したものではないか、ということを論じたいと思う。

４．ことばの使用と「言語相対主義」

女性ことばの考察と絶えず関連づけて論じられてきた問題に、「言語相対論」（Linguistic Relativism）がある。これは、話し手の思考は、その人が話す母語によって、相対化されているという主張である。このような考え方は、サピア（Edward Sapir）や、ウオーフ（Benjamin Lee Whorf）によって主張されたので、「サピア・ウオーフの仮説（Sapir-Whorf Hypothesis）」としても知られている。私たちは、決して客観的な世界に住んでいるのではなく、母語によって無意識につくられた世界に住んでいる、母語が決めたやり方にそって、世界を見たり、聞きたり、認識しているのだ、というのがこの主張である。[17]

サピアやウオーフは、もう今から50年ほどまえにこの主張をし、それ以後、いろんな人がこれにたいする賛否両論をとなえてきているが、最近、新しい観点からこの問題に取り組んでいる研究がいくつかある。そのひとつに、ヴィアズビッカ（Anna Wierzbicka）によるものがある。彼女は、いろんな文化圏をとりあげて、その文化のキーワードを見つけだし、そのことばがいかに、その言語を母語とする人の思考や文化形成と連関しているかを考究している。[18] たとえば、「お見合い」ということばをもつ日本語では、父親は、娘の「お見合い」について熟考することであろう。そして「見合い」という単語はたんに、日本社会にある社会的儀式のみにおいて反映しているのではなく、人生の最も重要な出来事である結婚にある種の考え方を反映するものであるとしている。だから、ある文化における語彙は、その文化のなかで生きている人々のものの考え方を反映しているのみならず、同時に、それを形作っているということができる。

もちろん、このような立場に反対している人たちもいる。たとえば、ピンカー（Steven Pinker）は、「概念」は、特定の言語からは独立して存在しているものだから、「自由」や「平等」という概念はどの言語を話そうとも存在している、と主張している。[19] しかしヴィアズビッカによると

「自由」や「平等」という概念も多くの言語では、実はことなった意味をもっていて、言語から独立しては、それらの意味は存在していないと主張している。さらに、もっと過激に、人間の感情として普遍的であると思われているような、「悲しみ」とか「怒り」とかいう感情も実は、言語によっていると主張している。英語の“sadness” とか“anger”とかいう単語は、他の言語には、同等のものはない場合もある。そうであるなら、これらの英単語であらわされる感情ではなく、他の言語に単語が存在する感情で、英語にはそれに相当するものがない感情を普遍的と考えてはなぜいけないのか、と主張するのである。

ヴィアズビッカの理論のもうひとつの特徴は、意味的メタ言語（Semantic Metalanguage）を提唱していることである。彼女は、単語の意味は、ごく少数の基本的な単語を使って、書きあらわすことができるといっている。たとえば、英語の“friend”という単語であらわされる概念が、もとから言語から独立して存在すると考えるのは誤りであるということ、英語文化のなかでさえも、歴史的にその概念が変化してきたことなどを興味深くとりあげている。[20] 次は、英単語“friend”の意味を意味的メタ言語を使って書き記したものである。

(11) **Friend**

I know this person well
I want to be with this person often
I want to do things with this person often
when I am with this person, I feel something good
I think this person thinks the same about me

これは、あくまで、英語における“friend”の概念であり、彼女は、この単語に対応するロシア語、ポーランド語、ドイツ語の例などをあげて、いかに、その概念がことなっているかを示している。

ヴィアズビッカ自身は、「女性ことば」について発言していないが、私は、彼女の一連の著作に影響をうけて、この「言語相対論」の考え方は、これまで見てきた「女性のことば使い」や「女性のコミュニケーションの方法」の考察にも、有益な観点を提供してくれるのではないかと考えている。

例示しながら、見ていくことにしよう。アメリカ女性の友だちどうしの話し方を研究した興味深い研究がある。ここでは、女性にとって、 friendship という概念はなにを意味するのかを深く追求している。また、この研究では、女性の friendship において、「話す」(talk) ということが、キーワードであるということが明らかにされている。さらに、男性と女性の「友だち関係」にたいする考え方の違いについても言及している。女性のほうが、友だちと個人的な親密関係を重視し、個人的なことを打明けるのにたいして、男性の方は、いっしょになにかのアクティビティーをするのが「友だち関係」であるといっている。

この研究では、インタビューをとおして、「友だち関係」の本質を探ろうとしている。アメリカの女性になされた「友だちとどんなことをするか」という質問にたいしては、「コーヒーを飲みな

がら、ただ座って、話しをするのが友だち関係である」という答えが多かったということである。「友だちというものから、もっとも大切なものが引き出されるとしたら、それはなにか」という問いにかんしては、

(12) a. Someone to talk to.
b. Just the fact that we can talk.
c. You need somebody you can talk to.

というような解答がほとんどであったということである。[21]

いま紹介した friendship の概念の男女比較の研究との関連で、私が主張したいことは、前節で見た、女性のコミュニケーション行動としての女性の話し方と、「友だちとはこういうものだ」という「友だちの概念」とが、一致しているということである。話し手が聞き手にたいしてもっている、コミュニケーションの場や関係の概念をあらわしている語彙 —— ここでは「友だち関係」(“friendship”) —— がコミュニケーションの行動を規定しているのではないか、と考えるわけである。

女性のもっている「友だち」(“friend”) にたいする概念は、「友だちとはなにか」というアンケート結果からうかがうことができる。まず、「友だち」というものは、批判なしに、お互いの話を聞きあう間柄であると考えているということである。友だちからは話をするということを通して、精神的な支えを得るということ、問題を分かち合うものである、という考えを、女性は「友だち」にたいしてもっている。次の引用は、「友だちとはなにか」という質問にたいしての典型的な答えである。[22]

(13) a. We don't cut each other down. We just accept what's going on, and I feel this is different from relatives who always want you to be a certain way.
b. There have been some family problems, and I've needed a lot of encouragement, and she gives me that encouragement. She makes me feel really good about being myself.
c. I feel when I'm with her, I'm totally honest. I can say whatever I want to. Sometimes I feel there are very few times in my life when I really can do that.

いずれにせよ、「話をすること」が、女性の「友だち関係」(“friendship”) という概念に、大きな役割をしめており、しかも、自己の内面をさらけだすように話をするということに大きな価値をおいているということがわかる。これは、第3節で見た、女の子が、話をすることによって、お互いの連帯意識を高めつつ、友情関係を保っていく会話のスタイルと平行関係にある。

このことは、会話の進め方の基礎には、当該の言語の語彙の体系があるということを示している。つまり、ディスコースのレベルである言語の用い方、会話の進め方は、一見、語彙という最も基本的なレベルを超越した原則によっておこなわれていると考えられているが、実は、基本的

な語彙のレベルが大きく関与しているのではないだろうか。

ここで、思い出すのが、ロビン・レイコフが『言語と性』で紹介しているおもしろい話である。専門的な場面（たとえば、言語学者たちが言語学の話をしている場面）で、直接に相手を呼ぶのではなく、間接的に言及する場合、相手の姓である「ジョーンズ」(Jones) と呼び捨てにするのは、自分の同僚または、専門研究職の仲間として、まともに受け入れられる人間であると認めている証しになると思うと、述べているところである。女性たちが専門研究分野にしだいに進出するにつれて困ったことがおこってきたという。つまり、話題の人が対等の同僚であるが、しかし、個人的な表現をしたくないとき（個人的な表現をしたいときは、英語では、ファースト・ネームを使えばよい)、女の人をさして、「ラスト・ネームの呼び捨て」が使われた場面には、一度もでくわしたことがないという。ここで、ロビン・レイコフは、「男の同僚たちは、無意識にせよ、そうでないにせよ、女性を自分たちの仲間に入れることを嫌っているかのように見える」と分析している。[23] この場合、男性の専門職の人々は、排他的で、女性を仲間に入れることを嫌っているので、仲間うちの呼び方である「ラスト・ネームの呼び捨て」を使わないのである。ここで、ヴィアズビッカが提案している英語の“colleague”という概念の意味を、意味的メタ言語を使って書いてみよう。[24]

(14) **Colleagues**

these people are people like me
these people do things of the same kind as I do
not many other people do things of this kind
I think something good about these people
I think these people know a lot about some things
because of this, these people can do things of this kind
I think these people think the same about me

注意すべき点は、この人たちは、自分たちの仕事がよい仕事であり、専門職であると思っており、相手も自分のことをそう思っている、なにかしらの特権意識や排他意識があるということである。もし、自分たちの仕事仲間が、英語で“colleague”と呼ぶにふさわしい仕事であるならば、自らの仕事をそのように範疇化する“colleague”という語彙の存在が、仲間うちで自分たちをどう呼びあうかというコミュニケーションの行動に影響をあたえているということができるのではなかろうか。

このことからいえることは、男性、女性にかぎらず人間関係を規定している単語――ここでは、“friendship”と“colleage”を検討したが――によって、その人間関係が話し手にとってより明確化されて、言語行動やコミュニケーション・パタンに影響をあたえるということである。

むすび —— 女性ことばと「異文化コミュニケーション」

性とことばをめぐっては、男女のことばのちがいを「支配」として見るか、「ちがい」として見るかという、2つのアプローチがある。「支配している」と「支配されている」という観点から見れば、女性のことばは、男性のそれにくらべて、おとったものとか、「逸脱している」というふうに考えなければならざるをえない。これにたいして、「たんにちがっているもの」というとらえ方をすれば、女性のことばやことば使いは、コミュニケーションにおいて有効な方法であるということを賞賛的に記述することもできる。また、「支配」「支配されている」という観点から見れば、男性と女性のコミュニケーションの記述や説明には便利かもしれないが、女性どうしのコミュニケーションを説明するのには困難さをともなうことになる。「ちがい」に焦点をあてていくアプローチでよく知られているのは、デボラ・タネン（Deborah Tannen）のアプローチである。しかし、ちがいがあるからそれを記述しておわり、という姿勢では困る。ちがったスタイルを積極的に受け入れていくという姿勢が大切である。

最後に、「女性の話し方は丁寧か」という問題をふりかえってみたい。さきほどは、「ほめことば」を考えて、一見、女性のほうがポジティブ・ポライトネスに敏感であるといえるが、実は、男性が「ほめことば」というものをどう考えているかということによって、一概に、女性のほうが丁寧な表現を好む、とはいえないのではないかということを述べた。

このような説明は、男性のほうが、あるいは、女性のほうが「より丁寧」であるということをいっているのではなくて、スタイル（style）のちがいとしてとらえたらよいのではないかと考えられる。ロビン・レイコフも、『言語と性』の著作のあとで、男性と女性のことば使いのちがいをスタイルのちがいとしてとらえることを提唱している。レイコフは、話し手が聞き手とどういうかかわり方を考えているかということを基準にして、4つの戦略があるとしている。

① 明晰であれ
② 距離をつくれ
③ 敬意をあらわせ
④ 親愛感をあらわせ

これは上から下にむかってだんだんと人間関係の密度が濃くなっていくひとつの連続体として見ることもできる。レイコフはこのモデルを使って何人かの個人のスタイルを分析しているが、その結果から「女性ことば」は「敬意－親愛」のスタイルであり、「男性ことば」は「明晰－距離」のスタイルであるということを示している。

このアプローチには批判もある。いちばんの批判は、現在すでに社会に存在している女性が男性より社会的に差別的な立場におかれているという現実を見ないで、「ちがい」としてとらえることは、社会の問題を解決することにならないというものである。たとえば、男ことばでは、「おい、ビール飲むか」と丁寧表現を使わずにいうことができるのに、女ことばでは、「あなた、ビール飲

みますか」と丁寧表現を使わなければならない。このように相手に「要求する」という強い行為である「質問」をする場合には、女性は、男性より「丁寧な形」を用いるのが一般的になっている。このように、「女性ことば」には社会が女性におしつけている従来の男女の役割にたいする固定観念がうめこまれているのである。ことばは私たちが意識している以上に自らの思考や行為に影響をあたえる。人間がことばを使う主体であるべきで、ことばに影響された生き方をするようになってはいけない、という批判である。

女性ことばの研究は、まだ、はじまって30年ほどである。しかも、これまでの多くの研究が、男性と女性の会話の分析に向けられており、女性どうしが、男性がいない場面で、どのような話し方をするかという研究はほとんどなされていない。また、男性が、女性がいない場面では、どのような話し方をするのかという研究も、英語にも日本語にもほとんどないのが現状である。女性ことば研究の多くは、ロビン・レイコフの古典的著作のタイトルにもなっているように、社会における女性の地位という社会的な観点からの考察がなされてきた。そのような分析がはたしてきた役割が大きいことは明らかであるし、重要な視点であることは当然であるが、最後に見たように、スタイルとしての男性ことば、女性ことばを検討してみれば、言語がたんなるコミュニケーションの道具ではなく、その言語を話している人の概念をどのように反映しているか、また、言語と思考という、複雑ではあるが、興味深い問題に私たちをさそってくれる導き手となるのではないかと考えている。

注

(1) Robin Lakoff, *Language and Woman's Place* (New York: Harper & Row, 1975). かつえ・あきば・れいのるず訳『言語と性：英語における女の地位【新訂版】』（東京：有信堂, 1985）.

(2) Otto Jespersen, *Language: Its Nature, Development and Origin* (London: Allen & Unwin, 1922). 市河三喜他訳『言語：その本質、発達および起源』（東京：岩波書店, 1927）の「婦人」という章を参照。レイコフの研究以後の研究もふくめて、女性ことば研究と言語理論とのかかわりについては、Deborah Cameron, *Feminism and Linguistic Theory* (London: Macmillan Press, 1985). 中村桃子訳『フェミニズムと言語理論』（東京：勁草書房, 1990）が参考になる。

(3) 同様の例は、中村桃子『ことばとフェミニズム』（東京：勁草書房, 1995）の第２章「he/man の問題――人間は男である」に興味深く論じられている。

(4) R・レイコフ、れいのるず訳, pp. 53, 56.

(5) R・レイコフ、れいのるず訳, p. 65.

(6)「会話の格率」については、H. P. Grice, "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, P. Cole and J. L. Morgan (eds.) (New York: Academic Press, 1975) を参照。

(7) Janet Holmes, *Women, Men and Politeness* (London: Longman, 1995). この著作の内容を簡潔にまとめたものとして、Janet Holmes, "Women's Talk: The Question of Sociolinguistic Universals," *Language and Gender: A Reader*, Jennifer Coates (ed.) (London: Blackwell, 1998) もわかりやすい。

(8) 例文は、Ronald Carter, Angela Goddard, Danuta Reah, Keith Sanger and Maggie Bowring, *Working with Texts: A Core Book for Language Analysis* (London: Routledge, 1997), p. 296 より。

(9) 例文は、Janet Holmes, "Women's Talk: The Question of Sociolinguistic Universals," p. 464 より。

(10) D. H. Zimmerman and C. West, "Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation," *Language and Sex: Difference and Dominance*, B. Thorne and N. Henley (eds.) (Rowley, Mass.: Newbury House, 1975) を参照。

(11) 例文は、Janet Holmes, "Women's Talk: The Question of Sociolinguistic Universals," p. 464 より。

(12) Janet Holmes, *Women, Men and Politeness*, p. 123.

(13) Penelope Brown and Stephen C. Levinson, *Politeness: Some Universals in Language Usage* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978) を参照。さらに、『月刊言語』(大修館書店) の1997年6月号では「ポライトネスの言語学」と題した特集を組んでおり、現在のポライトネスの理論を概観するのに好都合である。

(14) Janet Holmes, *Women, Men and Politeness*, p. 128.

(15) Deborah Tannen, *You Just Don't Understand: Men and Women in Conversation* (New York: Ballantine Books, 1990), p. 249.

(16) Deborah Tannen, p. 252.

(17) 言語相対論の最近の研究動向については、John J. Gumperz and Stephen C. Levinson (eds.), *Rethinking Linguistic Relativity* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996) を参照。

(18) Anna Wierzbicka, *Understanding Cultures Through Their Key Words: English, Russian, Polish, German, and Japanese* (Oxford: Oxford University Press, 1997) を参照。

(19) Steven Pinker, *The Language Instinct* (London: Penguin Books, 1994), 椋田直子訳『言語を生みだす本能(上・下)』(東京：日本放送出版協会, 1995) の第3章は言語相対論の全面的否定である。

(20) Anna Wierzbicka, p. 52.

(21) Fern L. Johnson and Elizabeth J. Aries, "The Talk of Women Friends," *Language and Gender: A Reader*, Jennifer Coates (ed.) (Oxford: Blackwell, 1998), p. 219.

(22) Fern L. Johnson and Elizabeth J. Aries, pp. 219, 220.

(23) R・レイコフ、れいのるず訳, pp. 53, 56.

(24) Anna Wierzbicka, p. 52.